
銀の十字は闇に映え

NACONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の十字は闇に映え

【Nコード】

N5255Y

【作者名】

NACONO

【あらすじ】

近頃街を騒がせる怪盗『銀雪の十字架』。ティノ・ヴァイナマイネンはどこにでもいるような普通の大学生だが、『銀雪の十字架』の一員という裏の顔があった。大学の先輩ベルヴァルドやある縁で知り合ったダンジエツト、ノーレンディアとアイリスの兄弟と共にある目的のため、日々暗躍しているのだ。一方その頃、ティノの親友エドアルド・フォンヴォックは彼の行動を怪しみ、友人のトリス、ライヴィスと共に独自に調査を始める。ティノたち『銀雪の十字架』の目的とは？そして両者が交わったとき、何が起ころのか

？北歐ファイブとバルト三国中心の小説です。

新月の夜に

明日の夜十一時、宝石『海の欠片』をいただく
by 怪盗・銀雪の十字架

ある美術館の窓に挟まれた一枚のカード。白地の厚紙に銀色の十字架が描かれ、その上に黒い文字でそう書かれていた。

そのカードが届いた翌日、当の美術館は勿論警察署も騒がしくなり、街はその話題でもちきりになった。
今宵もまた『彼等』が来るのだと。

そして、夜が来た。

今日は新月で、ただでさえ暗い夜の街は一層暗闇に包まれている。
そんな街の高名な美術館の屋上に人影があつた。その数は五つ。

「あと少しですね……」

「おう」

「今日も行くつペー!!!」

「あんこは黙れ」

「静かにして。こんな時に騒ぐなんて信じらんない」

五人が思い思いのことを口にしていた時、十一時を告げる時計の鐘が大きく鳴り響いた。

「……行くぞ」

そしてそのうちの一人、薄い金色の短髪に青い瞳の青年がそう言った次の瞬間、五人の姿は消えていた。

静かだった街が、サイレンや人々の叫び声に包まれたのは、それから間もなくのことだった。

いつもの朝（前書き）

ようやく物語開始。彼等をメインにすると結構難しいです。

いつもの朝

六畳程の、アパートの一室。カーテンのついていない窓から朝日が差し込み、部屋を照らしていく。部屋の中心には白く角張った小さなテーブルがあり、その上には本や新聞が積まれ、白地に水色の十字が入ったマグカップが置かれていた。昨晚何かを飲んだのか、中がうつすら茶色い。

そしてすぐ側にあるベッドに、誰かが眠っていた。

「うーん、今何時……?」

布団から金色の短髪に茶色い瞳をした青年が起きてきた。彼、ティノ・ヴァイナマイネンはゆっくりと立ち上がり、洗面台の方へ歩いていく。そして髪をとかして顔を洗い、着替えが終わった時、インターホンが部屋に鳴り響いた。

「エドアルドか。相変わらず早いね」

ティノは目をこすりながらドアを開ける。そこに立っていたのは金色の短い髪と青い目をした彼の親友エドアルド・フォンヴォックだった。

「君がゆっくり過ぎるんだ。もうすぐ九時だよ? 早起きは三文の得っていうのに」

エドアルドは眼鏡を人差し指で上げながら、呆れたような顔をする。

「今日は午後から授業なんだから、別にいいじゃないか。君こそ何で、授業がない日でも早起きできるの?」

ティノも負けじと言い返す。もはや日常茶飯事となった、ティノとエドアルドの朝の会話。大学の授業がある日を除けば朝がかなりゆつくりなティノを心配し、逆に早起きが習慣となっているエドアルドが彼を迎えに、というより起こしに来るのだ。

一歩間違えれば喧嘩になりそうだが、いつもそうなることはないし関係が悪化したりもしない。十年来の親友である二人にはすっかり分かっているのだ。エドアルドの行動がティノを心から思っている

故のものであることも、ティノの行動には悪気がないということも。

「でも来てくれてありがとうね。とりあえず、もう少しで準備終わるから上がってよ。コーヒー淹れるし」

ティノはそう言って微笑み、親友を部屋に招き入れた。やはりしっかりとエドアルドの気持ちがかかっているのだ。一方のエドアルドもありがとう、と微笑んで彼の部屋に入る。そしてシューシューというヤカンでお湯が湧く音を聞きながら座っていた時、テーブルに積まれた新聞が目に入った。

「あれ、ティノって新聞読むの？」

「そりゃそうだよ。読み始めたのは最近だけど。あ、コーヒーはいったよ」

ティノは湯気の立ったコーヒーカップを二つ持って、エドアルドの待つテーブルの方へやって来た。

一番上に積まれた新聞は、『銀雪の十字架現る！』という見出しの記事が一面を飾っていた。

ティノの部屋を出て、二人で雑談しながら大学までの道を歩く。朝の空気は少し冷たいけれど清々しく、太陽の光が眩しい。

そんな二人の横を、誰かが通って行った。

「……ひいっ!?!」

「おはようございます、ベールさん」

「おう」

エドアルドはその人物を見て少し後ずさるが、ティノは笑って挨拶する。それに対し、相手も彼に無表情だが挨拶を返す。

金色の短髪に青い瞳、そして眼鏡をかけた無表情で長身の青年

彼が二人の大学の先輩であるベールヴァルド・オキセンスシエルナだ。周囲からは恐れられているがティノは色々付き合いがあるらしく普通に接していた。

「よく話せるね、あの人と……」

「最初は怖かったさ。でも慣れたよ。それにベールさんは、ちょっと口数が少ないだけで悪い人じゃないんだよ」

ベールヴァルドが通り過ぎた後で、二人はそんな会話をしていた。

これが彼のいつもの朝、一日の始まりだった。

『普通の大学生』であるティノ・ヴァイナマイネンとしての。

いつもの朝（後書き）

まずは北欧夫婦と、バルトの優等生に出てきてもらいました。あとの人たちも、もうすぐ登場する……はずです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255y/>

銀の十字は闇に映え

2011年11月20日20時22分発行